

MEMBER

Associate Professor 伊藤香織

M 2 尾上永晃

篠崎哲平

篠田尚紀

竹川征

仲村明代

平川聡

M 1 市野吉則

今浦善

斎藤文寛

笹谷竜起

佐野由有

城間さわ

中谷将

B 4 川喜田涉

木村智裕

坂下拓弥

白井葉子

鈴木志帆

関口由佳

高橋祐二

谷知子

中口裕太

芳賀慎司

船瀬暉

本田元

益子岳貴

fab C. vol.3

2009年1月1日 発行

編集 中谷将 川喜田涉 鈴木志帆

谷知子 益子岳貴

発行 伊藤香織都市計画研究室

東京理科大学

理工学部 建築学科

〒278-8510

千葉県野田市山崎 2641

TEL: 04-7123-4785 (研究室直通)

URL: www.rs.noda.tus.ac.jp/~i-lab/

印刷・製本

祥美印刷株式会社

fab C.

vol.3



シビックプライド研究会のあゆみ

2006年3月 海外調査：ブリストル（英）、ロンドン（英）、バルセロナ（西）、ハンブルク（独）
（研究室からは伊藤（桃）、井上が参加）

第1～11回研究会開催

2006年12月 海外調査：サンティエンヌ（仏）、ホルドー（仏）

第12～16回研究会開催

2007年3月 海外調査：ニューカッスル/ゲイツヘッド（英）、ブラッドフォード（英）、リーズ（英）、マンチェスター（英）、ロンドン（英）、アムステルダム（蘭）
（研究室からは井上、仲村が参加）

第17～38回研究会開催

2008年2月 経済産業省四国経済産業局主催のフォーラムでの招待講演

第39～48回研究会開催

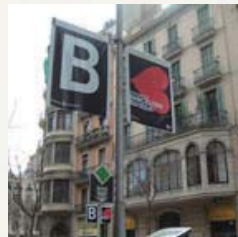
2008年11月 書籍『シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする』発刊



シビックプライド研究会

シビックプライド研究会は、伊藤香織准教授とデザインジャーナリストの紫牟田伸子氏を中心に、2006年3月から活動している研究会です。コミュニケーション専門家、建築家、アートプランナー、ランドスケーププランナーなど、産学の多彩な分野のメンバーが集まり、「シビックプライド（＝市民が都市に対してもつ自負と愛着）」とコミュニケーション・デザインについて、調査・議論・文献講読等の研究活動を活発に行ってきました。ヨーロッパの事例調査を中心とした研究会の2年半の成果は、書籍『シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする』としてまとめられ、2008年11月に出版されました。

研究会には、伊藤研究室から伊藤桃子、井上美奈（ともに2006年3月～2008年3月）、仲村明代（2007年2月～）、佐野由有、城間さわ（ともに2008年3月～）等が参加しています。研究会は活動を継続し、伊藤研究室としても引き続き積極的に活動に参加していきます。



シビックプライド：
都市のコミュニケーションをデザインする

伊藤香織＋紫牟田伸子（監修）
シビックプライド研究会（編）
出版：宣伝会議
ISBN 978-4-88335-208-1



人口減少や地方分権化など都市が大きな転換点に差し掛かっている現在、「シビックプライド（＝市民が都市に対してもつ自負と愛着）」の概念は、今までにも増して重要になってきています。本書では、シビックプライドを醸成し、都市がその個性と独自の豊かさを築いていくためのコミュニケーション・デザインを紹介します。【ケーススタディ】を中心に、【論考】【提案】を加えた三部構成になっています。本書が、都市の「気分」を伝え、都市への新しいアプローチのきっかけを作る一冊になることを願っています。



fab C. は、伊藤香織研究室[東京理科大学理工学部建築学科]が発行するフリーペーパーです。研究室の活動を中心に、都市の研究とデザインに関する情報やメッセージを発行していく媒体を目指しています。

Index

- 01 Civic Pride Project
- 04 UM+TUS Workshop
- 06 Research Activities
- 10 Design & Thesis
- 12 Picnic Interview
- 14 Individual Activities
- 16 Working in Foreign cities



Civic Pride Project



UM+TUS Workshop



彼らとの約1ヶ月間は、多くの発見と同時に、自分のものの見方にとってかなり刺激を私に与えてくれました。ほぼ全員が初来日という状況で、東京観光の王道（浅草や六本木ヒルズ、相撲etc.）から、プロジェクトのためのフィールドワークまで、毎日都内のどこかを歩き回る彼らはとてもバワフルでした。そんな彼らと過ごして、わたしたちが日常の中で、「潜在的にそうであると思い込んでいて意識していないこと」がたくさんあるということを改めて感じさせられました。彼らの何で？どうして？に、文化だとか習慣という言葉でまとめてしまったこと、ちゃんと答えられなかった部分も多々ありました。この体験を忘れず、これからはものごとの所以をちゃんと理解し、人に伝えられるようにしたいと思います。



修士二年 仲村明代

TOKYO (MINI) MEGA BLOCK ミシガン・理科大合同プロジェクト

2006～2007年にフルブライト研究員として伊藤研究室に在籍した建築家のBlaine Brownell氏が2008年5月、ミシガン大学の12名の学生とともに来日しました。“1,000 MILE CITY”と題された設計スタジオの後半は、伊藤研究室との共同プロジェクトとして行われました。

プロジェクト概要:

「九州北部から東海道を経て東北の太平洋岸に至るまで高密度に連続した“1,000 MILE CITY”。その中心都市東京は、明治期以降大規模な計画の実現を拒み続けてきたにも関わらず、交通システムを初めとする秩序によって、円滑に動いている。一方、近年では都内のあちこちで姿を現している複合施設が、再開発の一般的なモデルとなりつつある。東京の持つ文化的観念を維持し、消費・創造性・環境的持続可能性を促進し、歩行者が楽しめるような再開発“Tokyo (mini) mega block”を、都内のネイバーフッドに設計してほしい。」

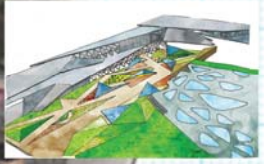
この課題に対し、日米合同で3グループ編成し、それぞれ上野、下北沢、向島を対象地として、設計を行いました。



約2ヶ月間共同設計したことで、普段見ている視点と異なる視点での回答を考えることができたように思います。彼らが着目したのは、下北沢で私たち日本人が様々な情報から感じるような街並やマチの特色ではなく土地の起伏に着目したところでした。彼らがworkshopの前に日本の都市を見て様々な視点から日本を観察していたことから、観光情報だけに依存しない自分たちなりの視点を提案に活かせたのかなと思ったことを覚えています。英語でのディスカッションや共同作業は意見を伝えること自体に非常に苦労しましたが、最終的な形としてはどの班も双方に新しい視点をとり入れた提案ができていたと思います。本当によい経験ができたなと思います。



修士一年 佐野由有



PANDA PROJECT
in UENO



The Culture Succession
in SHIMOKITAZAWA



Re:Connection
in MUKOJIMA

伊藤研究室ではひとりひとりが日々、研究や設計活動に取り組んでいます。そのフィールドは日本国内の都市や建築はもとより、海外にも広がっています。その中から四つの活動を取り上げ紹介します。

英国・ロンドンは、古いものと新しいものが絶妙に混ざったクールな都市です。それは景観にも現れていて、歴史的建造物を保全しながらも、近代建築が新しいランドマークとして加わって、賑やかな街並みを形成しています。

そこで私は英国建築都市環境委員会（以下CABE）の活動について調査しました。CABEは建築・都市環境の質を向上させるため、技術的なアドバイスを提供する国の行政機関です。特にその主要なサービスである、国内の重要プロジェクトへのデザインレビュー（以下DR）に着目し、調査を行いました。

具体的にはCABEへのヒアリング、DRの公聴、DRを受けたプロジェクトの現地調査などを行い、日々ロンドンの街を奔走しました。

その中で、ロンドンの人々は個々の建築が都市のありようと自分達の暮らしに大きな影響を持つことを深く理解し、さらに、古いものにも敬意を払いながらも、新しいものを積極的に取り入れる柔軟な精神を持っていることが分かりました。それは建築だけでなくロンドンのすべての文化に通じており、都市の魅力を高めています。

現地に三週間滞在する中で、肌で感じた全てを伝えることは難しいことでしたが、少しでもその面白さが伝わるようにと論文をまとめました。



井上 美奈
2008年修士課程修了

調査地
英国
ロンドン



平川 聡
修士二年

調査地
アメリカ合衆国
オレゴン州ポートランド

ポートランド国際空港に到着してバゲージクレームで荷物を受け取ると、そのまま段差なしで LRT (Light Rail Transit) に乗り込める。2.3 ドルのチケットで都心部まで 40 分弱。専用軌道を守る LRT に揺られ、ウィラメット川を渡ると郊外の風景からビル建築が立ち並ぶ都市の風景に変わった。同時に LRT は道路上をゆったりと走る路面電車としての顔を見せる。都心部の中心地に位置する電停で下車。すぐ脇には、愛称 the City's "living room" で親しまれる Pioneer Courthouse Square というすり鉢状の広場がある。読書したりおしゃべりしたり食事したり、皆が思い思いの時間を過ごしている。しばらくすると何やらステージが準備され始めた。いつの間にか人だかりもできる。オペラ演奏が始まった。先ほどまでとは打って変り、広場は皆が1つに注目するライブ感で満たされる。思いがけない出来事の余韻に浸りながら路面電車で宿へ向かった。

3年前に初めて訪れたが、ポートランドに居ると日常生活のなかでこのような楽しみと出会うことがよくある。そしてそれはいつも公共交通による都市内の気軽な移動と共にあった。この体験が現在作業中である修士論文のアプローチとなる。都市内交通が整う都市ならではの豊かな都市生活の姿を、ポートランドでの行動実態調査から描き出すことを目指している。





私は伊藤研究室で、設計活動を中心に自分がどのように社会に関わっていけるのかを模索しています。今年も長期休暇を利用して、春はベトナム、夏はヨーロッパを訪問しました。

ホーチミン・シティは人口約660万人（ベトナムの総人口の約7.7%）の大都市です。この街の風景は、圧倒的な交通量を誇るバイクと建物から路上に溢れ出る人々の活動から出来ていると言えます。生活の場として活用される路上には、日本の都市部のそれとは異なる豊かさを持っていると感じました。

パリでは日本と比べて空の見え方から全く違う印象を受けました。形態的に統一感があり隙間なく続く建築群は一繋がりボリュームとして感じられ、それが空を大きな固まりとして明快に切り取っているようでした。またホーチミンと同様にパリも外部空間が生活の場として機能しています。ホーチミンのような路上に加え、広場空間が日常の大きな役割を担っていました。特にボンビドー・センター前の広場は建物と一体感を持って賑わいを生み出しており、デザインされた広場というものを実感できました。

今後も研究室での活動と並行しいろいろな場所に出向き、そこでの体験を自らの活動に生かしたいと考えています。



齋藤 丈寛
修士一年

調査地
ベトナム社会主義共和国
ホーチミン・シティ

フランス共和国
パリ



高橋 祐二
益子 岳貴
坂下 拓弥
学部四年

調査地
日本
新潟県新潟市

全国の数多くの商店街が衰退する中で、新潟市にある上古町商店街は近年賑わいを見せています。そこでは商店街の空き店舗を利用して出店する若者が多く、彼らの感性が商店街に加わることで、古さと新しさの融合した新しい商店街の形を作っています。

実地調査では振興組合や店主の方々へのヒアリング、商店街の歩行者へのアンケート、リノベーション物件の実測などを行ってきました。また商店街が主催する千灯まつりというイベントのお手伝いをさせていただくなど現地の方々との交流を深め、より内から現状を見ることができるよう取り組んでいます。

上古町商店街は新潟市において高く評価されており、TVや雑誌などのメディアに取り上げられることも多々あります。私達の調査においても新潟放送の方に注目され、TV取材や調査の同行などがありました。

このような調査や研究成果が上古町商店街の発展に貢献できることを願って日々研究に励んでいます。



Design & Thesis

2007年度修士設計
都市のディライトを設計する 伊藤桃子

2007年度卒業設計
1. Lie on the Wall 青木萌子

2. 光共トイレ論 大浦万季

3. かざっ子たちの家 大島七恵

4. the tip of the iceberg 佐野由有

5. Daily Life & Special Life 中谷将

6. twist-服築- 西村祥子

7. Squaring of the square 初山陽子

8. 下北沢オープンスペース 大島祥吾



都市のディライトを設計する
伊藤桃子



Daily Life & Special Life
中谷将



twist-服築-
西村祥子

都市のディライトを設計する

本設計は都市に集中する文化施設に新しい形を提案し、アクティビティの関係性・連続性を設計することで、都市空間の持つ楽しさ(ディライト)を生み出そうとするものである。敷地・六本木に、大きささまざまな筒のような空間をいくつも並べてつけた。あるものは図書室であり、あるものはカフェだったりする。空間の繋ぎ目にあるのは、ちょっとした段差や視線のずれでしかない。滞在する人とその場を通り抜ける人の間にある壁や扉を消し、訪れる人に新しい出会いと楽しさを提供する。

Daily Life & Special Life

来外者に対する観光サービスの充実と、住民に対する生活サービスの提供はしばしば衝突するという考えに立つ。長野県安曇野市中心部の紡績工場跡地を敷地とする。リサーチから①観光・宿泊施設は市の周縁部に充実しており、観光客と住民は切り離されている②工芸品の体験型施設が多い③この地域について観光客が情報を得られる施設がない、などが得られた。そこで、住民と観光客の日常・非日常が混ざり合う場を計画する。周辺地域の情報を得て文化を体験することで、双方がこの街を「知る」ことができる。

twist-服築-

“平面の布を切ってつないで組み立てると立体の服になる。立体の服をほどいて平らにするとパターンになる。”最小限の切替によって生じたしわやねじれの間を通り抜ける空気。生地上での多種多様な線の動きにより変化する空気の流れ。[服]というシェルターを介して感じている。服を作るような手法を用いて空気の抜けや流れを作り、空間全体のつながりを表現した建築。[建築]というシェルターを介して感じていることを[服]で表現。2つの絡み合いは[人]が媒体となり内部から外部へと紡いでいく。

2007年度修士論文
英国建築都市環境委員会(CABE)による
デザインレビューの役割
-シティ・オブ・ロンドンの事例を通して-
井上美奈

地域社会との交流拠点としての道の駅に関する研究
猪俣昌也

都市再編時代の教育施設の立地とあり方
-東北7県の地方都市に着目して-
藤田省三

2007年度卒業論文(通年)
工業都市における自治体独自の土地利用コントロール
に関する研究
-尾崎市商業立地ガイドラインを対象として-
市野吉則・飯田千穂・笹谷竜起

自動車社会における公共交通の利用可能性
-那覇都市圏のパーク・アンド・ライドに着目して-
伊藤瑛子・城間さわか

2008年度卒業論文(半期)
自治体主導のシティプロモーションの現状と課題
-政令指定都市を対象として-
川喜田渉・木村智裕

複合ビルに付随するオープンスペースの
構成要素と利用者実態
関口由佳・中口裕太・船瀬瀬

産業遺構の活用に向けた地域の取り組み
-桐生市と西陣地区を比較して-
鈴木志帆・谷知子



Picnic Interview

◆日本にいらして、日本の都市、特に東京と、イスラエルの都市とではどのように違うと感じましたか？

— 似ていることはほとんどないので、答えるのは難しいですね。私は9年前に建築の学生として日本に来て、とにかくいろいろな場所を見ることから始めました。まちのなかで自分の目で見る現実に興味をもつと同時に、様々な写真や物語や紹介の中でそうしたものがどのように現れるのかに興味をもちました。それなので、私自身はあまり日本の都市のことを一般論として説明しないようにしてきましたが、もう少し一般論として考えてみましょうか。東京の人々は、辛抱強く、権力によって与えられた現実をそのまま受け入れていると思います。政府や地方行政やJRのような組織が日々の生活のリズムを作り上げている。イスラエルでは、人々はそうした都市の現実すぐに異議を唱えます。そこは大きな違いですね。たとえば、ハロウィンの時に仮装して山手線などの電車をジャックするというイベントは、与えられた現実への介入に創意を發揮するおもしろい例のひとつだと思います。別の反対の例をお話すると、日本の地図やサインなどのシステムは至れり尽くせりで、初めて行く場所の体験において不安を感じさせないようにしていたり、お祭りやイベントでも体験をコントロールする技術に力が注がれている。こうして体験がコントロールされていることに、気づいておくことは大切だと思います。

Picnic Interview とは？

伊藤研究室では、都市を知り、人に会おうために年に数回ピクニックを企画しています。このコーナーでは、ピクニックにゲストを呼んでワインやおしゃべりを楽しみながら都市や建築について語り合います。

◆東京にイスラエルの学生が来てワークショップをしたそうですが、どんなことをしたのですか？

— 去年の9月に東京に来た学生たちは、まちなかのあるいはまち土の関係性に興味を持って、動画を制作しました。今年、つい1か月前に来た学生たちは、デザイン成果を求められていました。彼等は、東京を有名にしているいくつもの場所に興味を持ちました。東京は、幾多の“伝説”に包まれた都市ですからね。結局、彼等は20の異なる設計プロジェクトに取り組みました。たとえば、公共空間と様々な技術（それは交通システムや携帯電話だったりするのですか）との関係に着目したプロジェクトなどがありました。また、イスラエルの学生は、設計する場所に対して批判的に提案を行うという特徴があり、彼等のデザインもそのような傾向がありました。

◆これから、どのような研究やデザインなどの活動をしていこうと思っていますか？

— 最近では、1年のうち半年はイスラエルで半年は日本にいて、6ヶ月以上の長いプロジェクトができないのが、目下の悩みです。イスラエルの大学では、“Extraterritorial Design Unit”という調査チームに参加しています。毎年違う都市を訪れ、調査をしています。特に、急激に変化しつつある中国や南米、アフリカ、中東などの都市には私たちは興味をもっています。様々な都市を訪れ、観察し研究テーマを見つけるのは良いのですが、まだ学部生レベルという印象で、まだまだ時間がかかりそうです。



Erez GOLANI SOLOMON

BEZALEL—Academy of Art and Design
客員講師

早稲田大学国際教養学部
Tel Aviv University
非常勤講師

Picnic DATA

2008年11月1日

13:00-16:00 晴れ

明治神宮内苑にて

Individual Activities

研究室のメンバーは研究室以外でも、様々な活動に対して企画・運営・参加などの形で携わっています。

山本理顕さん ピクニック インタビュー



食べ、飲み、たくさんお話を伺いました。インタビューは『建築雑誌』に掲載されました。



柏の葉 はちみつクラブ

幅広い年代の人たちと共に、ミツバチの飼育管理や採蜜、運営会議、蜜蝋



キャンドル作りなどのワークショップに参加しました。



都市学生 ネットワーク URBS.net

都市に興味を持つ学生が大学の枠を超えて集まる学生集団です。街歩き(月島・つくば・浅草など)や、お料理を囲んで都市に関する座談会・映画上映会を行いました。



En's



縁という線を紡いでいくこと。この原点を大切にしながら、フリーペーパーで培ってきたノウハウ、柏の魅力、ニッチな情報をウェブサイトでも公開しています。

www.ens-kashiwa.com

ぼくらは まちの 探検隊



上原小学校のこともたちと一緒に上原のまちを探検しながら、自分たちのまちについて考える、東京大学村松研究室プロジェクトに参加しました。

NY旅行

研究室のワークショップで仲良くなったミシガン大学の友人を訪ねて、NYに行きました。NY観光・セントラルパークピクニックなど過密スケジュールでしたが、半分旅行、半分生活のような2週間でした。



柏の葉 ピクニック クラブ

柏の葉エリアを拠点に、街中でピクニックを楽しむことで、身近な地域で楽しむ面白さを伝えていくことを目標に活動しています。



日本建築 学会大会

広島大学東広島キャンパスで開催された日本建築学会大会 (2008/9/18~20) で6本の研究発表を行いました。

CSIS Days

東京大学空間情報科学研究所センターで開催されたCSIS Days (2008/12/11~12) で1本の研究発表を行いました。

PINOCCHIO PROJECT

2008年にグッドデザイン賞を受賞した柏の葉で開催される街づくりイベントの運営に参加し、ピノキオに扮したこともたちのサポートをしました。



Working in Foreign cities



河上 諭

2006年3月に伊藤研究室で建築学科を卒業、同年4月から翌年8月まで北京のSAKO建築設計工社勤務、三里屯ラチス/北京プリオン/光華路SOHO等のプロジェクトなどに携わる。

* 海外へ行った経緯 *

卒業当時、中国では世界中から多くの建築家やそのスタッフ、その他様々な企業が集まっており、この多国籍な状況、バックグラウンドも言語も全く異なる人間を相手に、その大きな市場で、日本では考えられないような規模の建物の設計ができるというなら、もう行くしかないって。

* 都市について *

私が生活していた北京という街はとにかく色々な姿があって、あるところに行くと昔ながらの四合院が保存されていたり、その隣では大規模な開発工事が行われていたり、また、その近くでは夜になると労働者が道路で布団を敷いて寝ていたり、活き活きとした生活感があふれています。

* 海外での仕事 *

海外での設計業務というのは、まずその設計段階での法規や街の文脈、環境などの前提条件が全然違ってきます。中国では例えば、通常集合住宅のベランダを作ってもあまりに黄砂がひどいから、結局ほとんどの戸住に窓を増設して閉じてしまう。でも、それを設計段階で考慮している建物はないので、それが計画する際にクリアしなければならない条件となり、結果的に新しい空間を与えてくれたりもしました。また、中国では施工体制が24時間で動く為、施工図や現場への対応に追われ、睡眠時間すらあまりとれない。でもそんな中、OMA、スティーブン・ホール事務所等のスタッフたちとお酒を飲みながら、互いの状況を話し合うなんてことが、北京ではごく当たり前に行われているからとても楽しかった。国境を超えて集まってきた同じ目的を持つもの同士で情報を交換、共有し合うことが日常的に行われていることは、海外で働くこと、生活することの最大の魅力であると思います。中国では、常に新しいものが求められました。しかも表面的な新しさではなく、それに対する答えを建築家に期待される土壤ができあがってきている。その点で日本よりフィールドが広いといえるかと思います。



猪俣昌也

2008年3月に伊藤研究室で修士課程を修了、同年9月入社までの間、4月から8月までワーキングホリデーを利用してニュージーランドに滞在。

* 海外へ行った経緯 *

今回のワーキングホリデーは、将来海外で生活したいと思っていたけど、漠然としていて想像もつかないから、ワーホリで実際に経験してみようと思ったのが事の発端でした。



* 都市について *

その滞在先として選んだのはクライストチャーチ（以下CHCH）という人口約38万人のNZで2番目、南島では最大の都市です。最大の都市といっても、市内には数多くの公園・緑地が点在し「ガーデンシティ」と呼ばれ、中心部からバスで20~30分行けば、目の前に青い海が広がる断崖絶壁やら緑が広がる山脈やらを歩けるトレッキングコース（という名の獣道）があり、週末はランチ持参でよく訪れました。このようにCHCHはバス交通がメインであり、中心部にあるBus Exchangeと呼ばれる施設から街のありとあらゆるところへ行くことができます。日本みたいに混雑でも複雑でもないので、人込み嫌いで方向音痴の僕には最高でした。

* 海外での仕事・生活 *

仕事はというと、CHCH郊外の村にあるカフェ&レストランで2ヶ月間働きました。英語力がどうかよりも店長さんのお金や時間に対する考え方がかなりルーズで衝撃でした。もちろん英語力の向上にも繋がりましたが、それだけでなく海外で働くことで直面する文化の違いやそれによって生じる問題を体験することができて今後のためにも良かったです。住まいはNZ人の家に滞在させてもらっていたけど、皆さん本当に親切で、仕事や旅行の相談など彼らの存在無しでは、この充実したNZ生活は無かったです。そういう意味ではNZの両親とも言える人たちに会い、一緒に生活したことが最大の収穫です。

